『劇を創って遊んでいます。「言いたいことを劇にする」。これは誰にでもできることです。』

本作品の紹介としてパンフレットに記載されていた文章の一部を引用します。

「言いたいことを劇にする」という言葉に、「観客に伝える」という意味までが込められているとするなら、これは誰にでもできることではないと思います。

言いたいことを伝えるためには、そのための方法を考えることが必要になるからです。

ピアノの生演奏というを演出をされていたのですが、演奏者という「人」が舞台上に終始存在することの効果を考慮し、この手法を選ばれたのでしょうか。舞台上に人や物が存在するということは、その存在全てが効果を生み、舞台に影響を与えます。あえて生演奏という、ただの音響ではない手法を用いると、観客はその意味を探り始めます。しかし終始ただの音響効果として生演奏を用いており、必然性が感じられず、観客が作品に没入することを妨げているように感じました。

９歳児を演じる大人の存在も非常に気になりました。俳優が実年齢と大きく違う役柄を演じるためには俳優の努力も必要ですが、演出上の仕掛けが非常に重要だと思います。

大人の女性が野球帽を被り子どもの声色を真似ても、残念ながら少年には見えません。それでもなお、大人が子どもを演じるということの意味を考え、意義を見出し、観客とそのフィクションを共有できる仕掛けを考え抜くことが、この作品の大きな見せ場であり、課題だと思います。今回の創作で演劇集団広小路の皆さんがこの課題にどのように取り組まれたのか、非常に気になりました。

「ここは見えていないことにしてください、ここはこういう風に観てください」というメッセージは、観客に伝わらないと思います。

演劇は高齢者が子どもを演じたり、人間が動物や物を演じたり、様々な表現ができる芸術だと私も信じています。しかしそのためには、観客を幻惑したり説得するための仕掛けが必要で、その手法を考え抜き、試行錯誤することが創作の苦しみであり、楽しみなのではないかと思います。

劇を創って、言いたいことを観客に届けることができたら、本当に素晴らしいと思います。誰にでも出来ることではないから、それに挑むことに大きな価値があると思っています。大きな挑戦されている演劇集団広小路の今後の作品に大いに期待したいと思います。（講評者　本條マキ）